

おのれをさなきより酒をいのちとし

身にあまる大盃を引うけ初狂言の和田

■盛よりさつき下旬の富士見酒はさらなり

顔見世の翁わたし瀧の水絶ずくみて

■日も醒る事なし春は花になごりて

だらぬ小唄をはきすて秋は月に

すみて舞台の千鳥あしも

■□人の酔をすゝめてひさごを

■ふかき有がたきなりと酔ても

■す事五十年是大江戸の

■ふかき有がたきなりと酔ても

本性たがはざりしがことし此秋

新酒の口切る頃よりおもはず病ひ乃

体に酔ひふし今は壺中もむなしかるべし

■まはに盃をゆづるべきすけ手のなきはこれのみ

■かぬこゝちせしを幸ひ木場の酒相手

一升ぬしが一本気にけふよりみの助を弟となし

兄弟の盃せんと此上もなき酔後の肴これを此世乃

つもりさけ此うれしさをわすれなといくたびも／＼子に

くだをまく事とはなりぬ

何かいふたちか酒なり

雪の中

しうか述

合自然